

政務活動費 視察・研修会等 報告書（歌代公司）

視察都市 福岡県朝倉市（人口 50,624 人:令和 5 年 8 月 31 日現在）

視察日時 令和 5 年 10 月 25 日（火）
午前 午後 10 時 00 分～午前 午後 11 時 30 分

視察項目 ・ 秋月城下町観光コース
 ・ 秋月学校ガイドボランティアの会活動

◎視察概要

視察項目 ・ 秋月城下町観光コースと秋月学校ガイドボランティアの会活動について

- （１）説明要旨 ※以下の説明は、「秋月学校ガイドボランティア」観光ガイドの白木房代さん、江頭喜代子さんからお聞きしたり、「秋月郷土館」で展示されていた内容などの要約である。



秋月郷土館と観光ガイドボランティアのお二人

◎「秋月の歴史」

- 天正 15 年（1587）秋月種実は、豊臣秀吉の九州征伐で敗れ、日向財部（宮崎県高鍋町）に移封される。
 その後、秋月を含む筑前は小早川秀秋の支配地となるが、慶長 5 年（1600）、関ヶ原の戦いの恩賞として黒田長政が筑前国に封じられると、叔父の黒田直之に秋月を含む知行地 12,000 石が与えられる。
 直之は秋月に入り、秋月氏の里城であった杉本城を修復して城館とした。
 直之は熱心なキリシタンであり、慶長 12 年（1607）には天主堂が建立され、信者は 2,000 余名にも及んだといわれる。

- 秋月藩

元和 9 年（1623）長政の三男長興が、2 代福岡藩主となった兄忠之から夜須・下座・嘉麻 3 郡のうち 5 万石を分与されて秋月藩が成立。

秋月藩は福岡藩の支藩だったが、江戸幕府から直接朱印状が交付された独立藩であり、江戸後期以降は財政的な援助に伴う政治的な介入を受けつつも、本藩に対し独自性を有していた。秋月は明治維新に至るまで城下町として栄える。

今日に伝わる城下町の原型は、寛永元年（1624）黒田長興が入封した際に行った町割りを契機として形成されたもの。

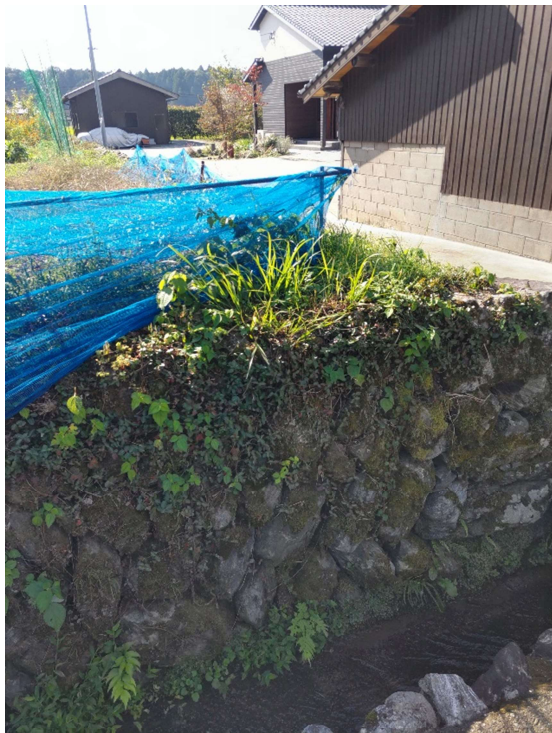
- 明治維新以降

秋月城下町は、廃藩置県により秋月県となるものの、わずか 4 ヶ月後には福岡県に合併され政治的な求心力を失う。明治 9 年（1876）に今村百八郎ら秋月党が挙兵した秋月の乱は、城下町として終焉となる。

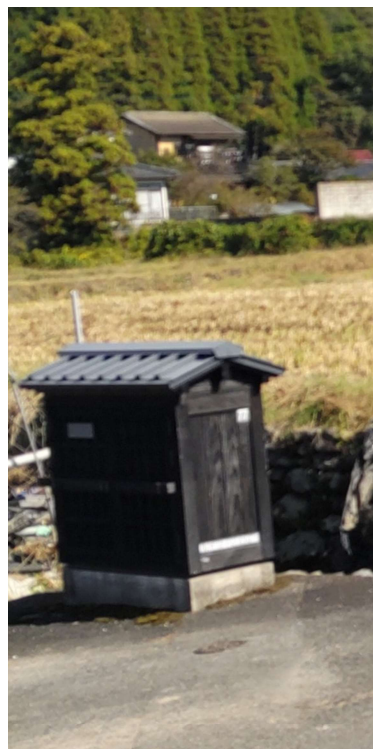
明治 22 年（1889）町村制の施行により秋月村となり、同 26 年（1893）には秋月町となる。人口の流出が続き、同 31 年（1898）の人口は明治初年の 66%までに減少した。

◎ 「秋月の町並み」

- 城下は中央を西流する野鳥川によって南北に大略二分されている。
- 北側には町地、南側には藩主の居館である秋月城を始めとする上級家臣団の屋敷が、周囲の山裾には寺社や下級家臣団の屋敷があった。
- 町割りには、中央の「札の辻」で交わる二本の道筋を基軸とし、城下の出入口には枡形を設けて番所を置き、武家地と町地も枡形で区画されていた。
- 江戸中期以降になると、人口の増加に伴い枡形の外にも町地が拡大。
- 経済的には在郷一の賑わいを見せた本藩領甘木の影響下に置かれたが、元結・寿泉苔・葛粉等の特産品により、「甘木千軒・秋月千軒」と謳われ甘木と並ぶ繁栄を見せた。
- 廃藩によって政治的中心地としての機能を失うとともに、秋月では士族の急激な流出が始まり、多くの武家屋敷は田地に転じた。
- 藩政期には幾度となく焼失した町地は、明治期以降は火災を被ることなく、多様な建築形式を呈する新たな町並みを形成したが、政治的求心力によって支えられていた経済的活力は次第に失われてしまった。
- しかし、その結果、町割りや屋敷割り、道路網と水路網などの基本的な構造、城館跡、武家屋敷、町割りなどの城下町の構成要素がそのまま保持され、今日にまで伝えられることとなった。



町全体が国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されていて、町中に往時からの石組みが見て取れる。水害に強い河川の整備も城下町のころ整備されたもの。その強固で丁寧な仕事ぶりは圧巻。護岸だけでなく川底まで石が敷き詰められている。



街並み、景観を考慮して消火栓にも“らしさ”の配慮が見られる。



このような屋敷が町中に並んでいて、現にお住まいである。
城下町の街組みだけあって、直線の道は少なく、ジグザクと進まないと城に着けない。

◎「秋月城跡と秋月中学校」

- 秋月城跡は、現在、秋月中学校になっている。その西側には、水堀、石垣、瓦坂(大手口)、長屋門(裏門)の遺構があり、往時の風情がうかがえる。

城跡南側には、初代藩主黒田長興公を祀る垂裕神社が建立されている。

参道登り口には、大手門の黒門が神門として移築されている。

秋月城下町は、町全体を平成 10 年（1998）国の重要伝統的建造物群保存地区に選定されている。

下記の秋月中学校の写真にある「稽古館の教え」は、秋月藩八代藩主長舒(ながのぶ)が、叔父である米沢藩主・上杉鷹山(秋月家から養子になった)の治世を模範としてつくった藩校である「稽古館」設立時から現在の中学校にまで伝わる指針である。



◎「天然痘と緒方春朔(しゅんさく)」

- 天然痘の予防ワクチン “ 種痘 ”。その国内における始祖で秋月藩医・緒方春朔（1748年～1810年）が活躍したときの藩主も八代藩主長舒である。
- 種痘法には2種類ある。天然痘に感染した人間の膿からワクチンを作り接種する「人痘法」と、英国の医学者であるエドワード・ジェンナーが18世紀末に研究開発した「牛痘法」である。
- 牛痘法が開発される前の18世紀前半、アメリカやイギリスで用いられていたのは人痘法であった。1748年生まれの秋月藩医・緒方春朔は、その人痘法での種痘法を研究。
- 寛政4年（1792年）、44歳の緒方春朔は、彼を支えた協力者の大庄屋である天野甚左衛門の申し出で、彼の子ども達に人痘法での種痘法を施術し成功した。
- 国内初の出来事で、種痘法の実用化に漕ぎ着けた。エドワード・ジェンナーより6年も早かったということである。



◎視察成果による当局への提言または要望等

まず、体感として驚いたのが、お二人の秋山学校ボランティアガイドのハツラツさ、その健脚であることである。2時間にわたって、緩やかな坂を上がり続け、下っては、また上がって中学校(城跡)の石段を登っても、息切れすることなく、お話しし続けておられた。「秋月城下町観光コース」で、ここまで歩き続けるには、参加者にも相応の体力が必要になることを実感した。

私も、かつて桐生市の観光ボランティアガイドの講座に参加したことがあった。桐生では、ここまで歩き続ける観光コースはないかも知れないが、「観光ガイドボランティアは、リタイア後の市民のやりがいづくりや健康増進、ひいては医療費削減に大いに貢献できる取り組みではないか」という思いを新たにした。

そのような観点も持った上で、桐生市当局も、一層「“織都桐生”案内人の会」の方々を支え、その存在や活躍が桐生市民にもより理解されるように努めるべきであると思う。

町並みに関しては、城下町ならではだが、桐生市以上に広域に保存されているようにお見受けした。城下町であるが故に、秋月城までに繋がる道は、直線ではなく、つづら折りになっている。田畑のふちにも石垣が見られ、往時さながらの武家屋敷がいくつも現存している。

桐生市の柄杓山城も、歩行距離 3.4 km、コースタイム約 1 時間 40 分の城跡遊歩道が整備されている。今少し、史跡としても、ハイキングコースとしても周知や活用があってもよいのではないかなと思う。民家が近いということもあるだろうが、それは秋月城下も同様である。秋月城下では、そのことを誇りにし、自ら自宅を拝観可能にしたり、城下で地元産の果物などを販売したりもしている。「城があった町」としての桐生市の今後の観光のあり方も熟考すべきであると考えている。

また、秋月城跡にある秋月中学校には、秋月藩の藩校である「稽古館」の指針である「稽古館の教え」の石碑があるが、この指針は、現在の秋月中学校でも指針として継承されているそうである。

現在、桐生市では、小中学校の適正規模・適正配置が審議されているが、これまで各地域にあった学校がどのような経緯でどのような指針をもって学び舎として存在したのか、その記憶も次代に繋げていただけるように、と、切に要望するものである。

◎所 感

朝倉市での視察で一番印象に残ったのは、秋月城跡にある秋月 中学校である。堀や石垣、大手門が現存するその構えは、威風堂々とした印象であるが、それよりも感服したのは「秋月藩の藩校の指針が現在も秋月中学校に生きている」という教育・文化・精神の継承についてであった。

十五カ条からなる「稽古館の教え」は、確かに時代掛かった感もあるが、現在でも人間修養の指針足り得るものであった。聞けば、

この教えは、往時の藩主が叔父である米沢藩主・上杉鷹山をその範としてつくった藩校の指針であったとのこと。

私見ではあるが、現代では「自由」と「放逸」が混同されている気がする。秩序や規範なき生き方の先に、真実、人の役に立てる人生があるとは思えない。

この点に関して、この「稽古館の教え」が現在の中学校でも生きた指針として生きているというのは、単に遺物を重んじるのではなく、そこにあった生きた智慧を、英知をこそ継承することは、そこに生きる若者にとっての誇りの基となり、かつ、先人への畏敬の念を持ち故郷を大事に思う大きな力たり得ると思う。

朝倉市は、全国的に見ても、高齢化率が高いそうである。精神論 だけで町が繁栄するわけではない証左であると思う。しかし、明治維新後の急激なイノベーションのなかでも、地域を、国を支える人材輩出に貢献したような学び舎の精神を一度手放せば、二度と復活することは無いだろうと思われる。なぜなら、それは、持続的に継承され続けてこそ、生きるものだからである。

この点、学校の適正規模・適正配置を検討している桐生市でも、地域の文化、教育の歴史、それを支えた人たちの存在など「無くしてはならぬもの」を継承できるように熟考すべきであると考えている。